

論文

立命館コースを中心とする学ぶ目的や目標を育てる 進路指導プログラムの構築

～立命館大学へ進学した慶祥卒業生によるアンケート結果を中心に～

寺岡 正樹 (立命館慶祥中学校・
高等学校事務室)
伊藤 昇 (大学行政研究・研修
センター専任研究員)
近藤 茂生 (一貫教育部次長)
村上 亨 (立命館慶祥中学校・
高等学校事務室長)

要 旨

本稿は、附属校である立命館慶祥高校における立命館大学への内部進学者に対して、高校1年4月から具体的な成績管理や進路目標管理を行っていく進路指導を提案するものである。慶祥高校は他の附属校と違い、半数が内部進学をし半数が他大学に進学する方針をとっている。北海道における慶祥の立ち位置からその方針は今後も堅持することとなるため、内部進学者数の増加を目指すのではなく、内部進学者が現在よりも学びと意欲をさらに持って立命館大学に進学していくための手立てについて、立命館大学に在学している慶祥卒業生アンケートから浮かび上がった課題に基づいて政策提案を行っている。その政策内容は、大学入学後の成長を担保するための基礎学力を高校において身につけさせるために、具体的な成績目標を掲げさせ、その成績目標を達成するために将来の目的も明確に描かせていくことである。その後押しとして、立命館大学に在学する学生や社会人と慶祥生との交流や、高校1、2年生と高校3年生との慶祥生同士の交流機会を設ける。

キーワード

立命館慶祥、内部進学、立命館コース、慶祥卒業生アンケート、進路指導、交流

I. 研究の背景

1. 附属校としての立命館慶祥中学校・高等学校の位置 とその特徴

(1) 学園の一貫教育と立命館慶祥中学校・高等学校の 特徴

立命館学園のR2020において小中高大院の一貫教育は、正課・課外を超えた「学びのコミュニティ」の中心としてリーダーシップを発揮し、コミュニケーション能力とタフなメンタリティを持ち、社会に貢献できる人材の育成を目標としている。こうした一貫教育による人材の育成には、高校と大学の接続の要である内部進学制度が重要となる。

内部進学制度とは、受験勉強を回避でき、のびのびと

学校生活を送ることができることだけではない。内部進学制度は高大あるいは中高大の一貫教育の内実を持たなければならない。それは、生徒が高大連携企画等を通じて大学での学びを知り、高校での多様な教育プログラムを通じて自分の目標を描き、それらを切り結びながら大学進学と自分の将来を深く思考することができるようにすることである。そして、希望学部への進学は、生徒本人のなかにある目標を実現するためであり、それによって進学後も強い意欲を持ちながら、学びと学生生活を送るということである。

立命館慶祥中学校・高等学校（以下慶祥校と略）は、北海道における立命館学園の拠点として、北海道を代表する私学としての教育内容・進路実績においてトップ校となることを目指している。特に立命館慶祥高等学校(以

下慶祥高校と略）は北海道に所在することから、他の附属3校（立命館高校、立命館宇治高校、立命館守山高校）のように卒業生の多くが立命館大学（以下RUと略）/立命館アジア太平洋大学（以下APUと略）に進学するのではなく、それを半数程度としている。残る半数程度は各自の希望に沿って地元の大学を含めて有力大学や難関大学に進学する方針をとっている。これが慶祥高校の他の附属高校と異なる特徴である。慶祥高校ではこのような方針から、東大や京大をはじめとする有力大学の進学を目指す生徒で構成するSPコース、北海道大学や首都圏などの難関大学への進学を目指す生徒で構成する他大コースとRU/APU進学希望の生徒で構成する立命館コースの志望進学別の三コース制をとっている。

（2）慶祥高校の大学進学実績と課題

慶祥高校は上述の方針に基づき、毎年300名程度の卒業生のうちRUに120～150名程度、APUに5～10名程度、他大学等に120～160名程度が進学している。過年度の進学実績は表1・2のとおりである。

一方で、2012年度入試（高校及び中学校）の受験者の志望動機をみると、有力大学や難関大学を目標としている層が相当数を占めている（中学は50%弱、高校は60%程度。詳細は後述）。慶祥高校が北海道私立高校におけるトップ校として確固たる位置を確立するためには、RU/APUへの進学に加えて、有力大学（東大・京大・北海道大・医大など）をはじめとする難関大学への進学実績が必須の条件となる。

同じ調査で、当初からRU/APUへの内部進学を志望動機としたものは中高共に低い割合（20%弱～25%程

表1 立命館慶祥高校からのRU/APU他大学進学者数一覧

	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
法学部	44	33	16	25	18	21	20
経済学部	11	4	1	17	8	5	1
経営学部	17	13	9	20	21	20	20
産業社会学部	37	27	27	34	17	20	18
国際関係学部	10	9	8	11	7	9	9
政策科学部	10	11	9	13	10	12	10
文学部	34	8	12	17	14	18	21
映像学部	-	7	3	6	5	6	3
理工学部	12	7	6	6	5	7	7
情報理工学部	9	2	1	3	1	4	4
生命科学部	-	-	0	3	1	3	3
薬学部	-	-	4	4	4	5	5
スポーツ健康科学部	-	-	-	-	4	4	4
R U	184	121	96	159	115	134	125
アジア太平洋学部	6	6	10	6	4	7	4
国際経営学部 （アジア太平洋マネジメント）	13	9	3	3	1	1	1
A P U	19	15	13	9	5	8	5
内部進学（構成比率）	203 (47.1%)	136 (42.5%)	109 (36.2%)	169 (48.3%)	120 (42.4%)	142 (47.0%)	130 (51.4%)
他大学進学数	228	184	192	172	151	160	123
卒業生数	431	320	301	350	283	302	253

表2 主要難関大学合格者数実績（既卒含む）

年度（卒業数）	国公立大	東大	京大	北大	医学部医学科	理科大	早稲田	中央	明治
2012（123）	63	2	1	14	9	5	10	2	7
2011（160）	77	2	5	24	22	15	8	14	8
2010（151）	64	3	1	22	15	13	7	14	8

度)となっている。志望動機と前述した実際の進学実績を見比べるとその間に開きがあり、この開きは具体的には有力大学や難関大学への進学希望者が内部進学者となることである。高校の終盤期に内部進学を決めたような生徒のある層は、自分のやりたいことがわからないなかでRU/APUの学部選択をしている実態がある(2011年度附属校プレエントランスアンケートでは進学者の30%程度)。こうした内部進学の生徒の実態を克服し、先に述べた内部進学の意味や位置付けにかなう生徒をどう育てていくのかというところに内部進学について大きな課題があり、本稿ではこの問題に焦点をあてている。

2. 北海道における立命館慶祥高等学校の位置と課題

(1) 志願者動向にみる立命館慶祥高等学校の位置

1996年に開校した慶祥高校は、他大学への進学と内部進学において相当の実績を上げるために生徒の質を確保する必要があった。このことから一定の受験者数の確保は必須の要件であった。そのために慶祥高校は内部進学制度とともに、特色ある教育内容、秀でた進学実績(表1・2)、大学入学後の活躍の実績などを受験生や保護者に学校の魅力として訴えてきた。志願者動向は図1のとおりである。高校の募集定員の変動(1996年度270名、1997年度330名、1999年度410名、2000年度350名、2002年度345名、2004年度315名、2005年度305名)に応じて受験者数も大きく変化している。なお、慶祥高

校開校時には中学校は併設されず高校単独校としてスタートした。2000年度に中学校を開設し中学校を卒業した生徒が高校に内部進学したのは2003年度である。

志願者動向は、2003年度から2005年度に急減しそれ以降も微減している。募集定員の減少や少子高齢化の影響の他、北海道特有の次の3つの要因があると考えられる。

第一は、北海道経済は官依存の経済体質であり、今日の経済不況の影響を強く受け、私立学校を選択することに対する心理的ハードルは学費の問題もあり一層高まっていると考えられることである。他の私立高校各校も慶祥高校同様苦戦している状況がある。

第二は、私立中高の教育内容に差異が少なくなったことが挙げることができる。慶祥開校当初は、先進的であった海外研修プログラムなどの教育プログラムも、競合校が類似の教育プログラム等を導入し、慶祥高校の独自性や魅力が色褪せつつある。

第三は、北海道における公私の進学をめぐる競争環境がさらに厳しさを増し、それが志願状況にも反映していることである。大都市である札幌市では、とりわけ札幌の東西南北といわれる四校の公立の進学校が強く、私立進学校も学力上位層にとっては第一の経済要因もあって、あくまで公立進学校の併願校の位置づけとなっている。

慶祥高校と競合する他の公立高校の進路実績は、表3

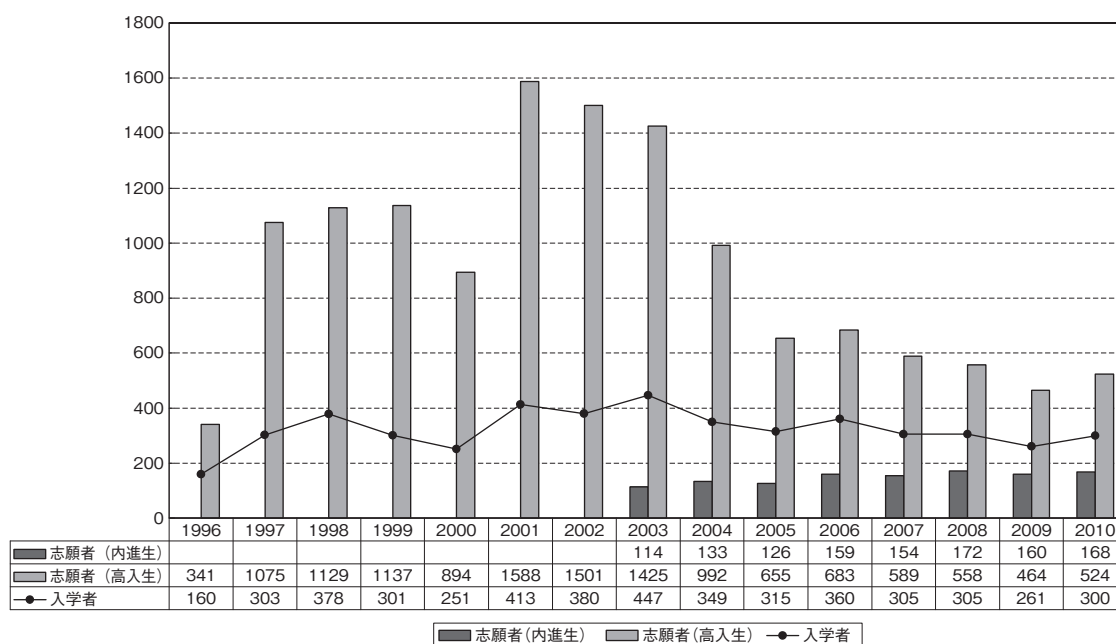


図1 立命館慶祥高等学校 志願者・入学者経年推移表 注：2002年度以前は志願者(内進生)は存在しないため空欄

表3 2011年度進学実績（既卒含む） 出典：平成24年度受験北海道高校ガイドブック（北海道学力コンクール）

	北海道大	道内国公立	東京大	京都大	東北大	大阪大	早稲田大	明治大	立命大
札幌南	130	40	12	7	6	5	32	24	8
札幌北	150	58	7	5	12	5	20		
札幌東	110	67		1	7	3	12	21	10
札幌西	99	68	6	3	9		21	30	5
札幌旭丘	52	66	1	1	7		7	19	
旭川東	53	65	2	5	13	4	21	17	
釧路湖陵	14	61		2	3	1	1	5	3
北見北斗	22	50		1		2	2	15	3
慶祥	24	35	2	5	1	2	8	8	134

のとおり高いものであり、必ずしも慶祥高校が優位であるとは言えない状況である。

(2) 公立校と競う慶祥高校の取り組むべき課題

このような状況の中で、慶祥高校が志願者の質量と大学進学実績で、これら札幌の公立四校をはじめとする道内の有力な公立高校と競うには、私学学費の高さを乗り越え、なお慶祥校に進学したいという魅力、すなわち、①私学慶祥として教育プログラムと教育の良さ、②有力大学や難関大学への進学実績、③RU/APUへの進学という3点のメリットをこれまで以上に充実させ、それを打ち出さなければならない。

3. 立命館慶祥中学校校・高等学校への志望動機と課題

(1) 受験生アンケートからみた志望動機

慶祥校は前述のような大学進学の方針とその実績から、志望する受験生・保護者の目的は有力大学と難関大学への進学と、RU/APU進学の2つに大きく分けることができる。しかし、高校受験時あるいは中学校受験時に行っているアンケート調査（2012年度入試時に実施）の志望動機をみると、その回答からは慶祥校の大学進学の二つの方針に対する社会の受け止めは必ずしも学校側が意図するものとはなっていない。

2012年度入試受験生アンケートでの慶祥高校の志望動機（図2）をみると、その上位3つの回答は、「東大などの難関大学進学実績」が273名（61%）、「多彩な海外研修プログラムに参加」が195名（44%）、「SPコースで難関大学を目指す環境」が164名（37%）となっている。まず、多くの受験生が難関大学への進学にあたって慶祥高校を評価していると読み取れる。さらに回答をみていくと、「自由に学べる」学校の雰囲気156名（35%）

は4番目に選択され、5番目は留学生が多く国際的な環境で学べる143名（32%）となっている。この二つの回答と先の上位三つの回答とを合わせると、慶祥高校は進学校であると共に、道内において自由に学ぶことができ国際化教育に熱心な高校であると認知されている。こうした評価の中にあって、附属の一貫教育校としてRU/APUへの進学を選択した比率は113名（25%）と低く、選択肢9項目中の6番目となっている。同じく慶祥中学志望動機の2012年度受験生アンケートをみると（図3）、上位3つは高校のそれと変わらず、RU/APUへの進学は10項目中の8番目となる60名（17%）という低い数字である。これらのことから慶祥校の志望動機としてはRU/APUへの進学はそう大きい位置を占めてはいないことがわかる。これは慶祥校が進学校としてみられており、立命館附属の一貫教育校としてそう強く意識されていないことを示している。

しかし、アンケートの回答から注目すべきことは、慶祥校は有力大学や難関大学への進学実績だけでなく、国際教育に関わる点（海外研修プログラムや多くの留学生〈年間30名程度〉と学べる）と「自由に学べる」という開放的な雰囲気が評価されていることである。これは慶祥校が「内部進学制度を有していることから、進学一辺倒ではなく多彩な海外研修などの教育プログラムによって、学習意欲を高めて有力大学や難関大学に合格する受験学力とともに幅広い人間形成も目指している」ことが受験生と保護者に浸透していることを示している。同時にこのことは、国際教育に関わる点（海外研修プログラムや多くの留学生との交流）や「自由に学べる」という開放的な雰囲気が、様々な理由があっても、前述のように内部進学において自分のやりたいことがわからず学部選択した生徒が30%もいるというように、RU/APU

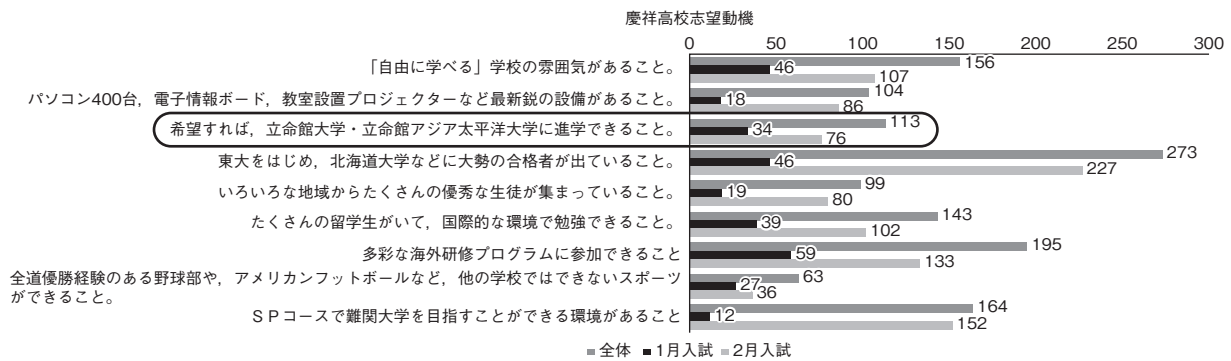


図2 (2012年度慶祥高校入試受験生アンケート 選択肢から3つ選択 n=446)

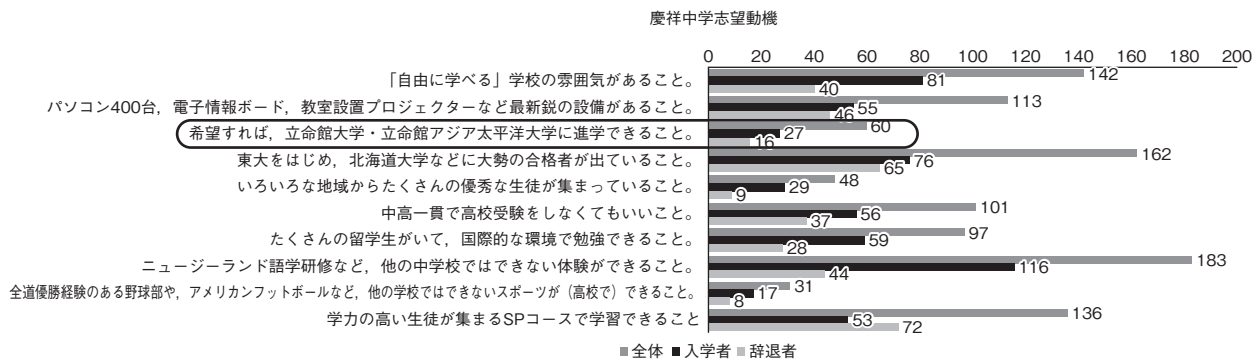


図3 (2012年度慶祥中学校入試受験生アンケート 選択肢から3つ選択 n=346)

への目的や目標などとして進学動機に結実していない。ここから次の二つの課題が浮かび上がる。

(2) 附属校慶祥としての二つの課題

一つは、国際化教育（海外研修プログラムや多くの留学生と学べる）や「自由に学べる」慶祥での中高校生活がRU/APUへの進学の目的や目標へと結実させることである。これは一貫教育の内実を慶祥で作る課題である。半数近くの生徒がRU/APUへ進学している（表1）ことから、この取組みは重要であり、本稿ではここに焦点をあてている。

もう一つは、同じく国際化教育（海外研修プログラムや多くの留学生と学べる）や「自由に学べる」中高校生活の成果が、RU/APU進学の目的や目標を大学において実現する学力や意欲として生徒に結実させることである。これは一貫教育の実績を作り出す課題である。この課題については、RU/APU側での国際化教育や慶祥校での中高校生活の成果を、RU/APU進学後にさら伸ばしていく大学の仕組みや教育プログラムが必要であるが。これは大学教育の中味そのものであるので本稿では取り扱わない。

4. 立命館慶祥高等学校の教育の仕組みと内容

慶祥高校は大学進学の方針から有力大学への進学実績を確保するとともに、一貫教育校としてRU/APUでの慶祥生の活躍の実績をあげることが必要となる。この二つの課題を両立させるために慶祥高校では次のような教育を展開している。

(1) コース選択と進路指導

図4のとおり、慶祥高校では慶祥中学校からの内部進学生と新たに高校から入学する生徒が併存している。内部進学生と高校入学者では授業進度にばらつきがある。このため、高校1年から2年の間は内部進学生徒クラスと高校入学生徒のクラスを分かれている。高校3年では内部進学生（180名規模）と高校入学生（125名規模）が混在する形で、特進クラスであるSPコース（60～70名規模）、RU/APU以外を目指す他大学コース（110名～130名規模）、立命館コース（120名～140名規模）に別れる。

また、学年進行ごとに文理の選択とコースの選択を行うが、その選択に向けて恒常的な進路指導が展開されている。生徒本人に対する指導は当然であるが、保護者も

含めた懇談会や説明会などを実施している（詳細後述）。また、立命館コースでは4つのコースを設け（図5）、本人の希望進路や方向性に応じて立命館コースのなかでいずれか1つのコースを選択することとなっている。生徒たちは日常の高校生活や複数の研修旅行などの機会も含めて将来の進路選択を行っていく。

（2）立命館コースの取組み

前述のように高校3年の段階で「SPコース」「他大コース」「立命館コース」に分かれる。それぞれの志望進路先に応じてのコースとなるが、立命館コース以外の2コースは受験勉強が中心となる。これ以降は、本研究テーマである学園一貫教育校として「立命館コース」に限定して論を進めていく。

立命館コースでは一貫教育として特徴的な授業が配置されている。例えば、法学部との司法講座や経営学部との企業家講座などのRU各学部と連携した授業を実施し、大学入学後の学びのイメージを高めるようにしている。また、衣笠キャンパスやBKCキャンパスで大学の講義を見学する機会を設け、RUを身近な存在とするような企画も行っている。その他、立命館コース対象に小論文科目も選択が可能となっており、卒業までに3万字の論文を作成する内容となっている。この科目は選択科目であるため、受講規模は理系と文系それぞれ15名程度2クラスの編成となっている。受講した生徒の満足度は極めて高い。さらに2011年度より立命館コース内に4つのコース（IR/LA/JB/SS）を設け、より進学目的や目

標を鮮明にさせたり、志望する学部毎に進学する学部において何を学ぶか、どう学ぶかなどを意識させたりするようにしている。

（3）立命館コースにおける課題

このように、立命館コースの生徒には学部選択に資する取組みが行われている。生徒はこれらの授業を通じて大学での学びを意識するようになり、高校3年の学習を大学あるいは学部での目的や目標を見定めながら主体的に行うことができる。他方で、前述したように、これらの取組みに関わらず目的や目標を見つけることができないままに立命館大学に進学していく生徒も存在している。これらの生徒の多くは、具体的には高校3年の学習に関してRU/APUに内部進学するために必要なミニムライン（評定平均3.0以上やTOEFL400点以上）をクリアすることを目指している。このような生徒が大学内でも課題となっている附属出身生徒の学力の二極化現象の下方の一極を占める可能性が高くなると考えられる。

また、慶祥中学2年の10月に京都研修としてRUのキャンパスを見学し、学園への帰属意識を高める企画の他、高校1年10月の平和研修で高校入学者はRUキャンパスを訪問し、中学からの内部進学者はAPUを訪問する。高校1,2年の11月には大学教職員(入学センターなど)によるRU/APUの説明会を毎年一回実施している。高校からの入学者にはAPUに訪問する機会は基本的に存在していない点など、物理的な制約から学園への帰属意識が涵養される機会が十分でないという課題もある。

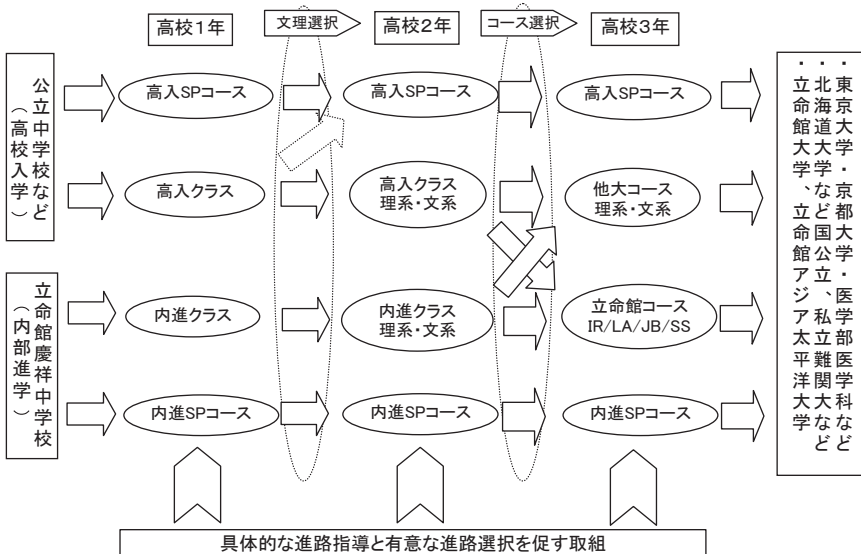
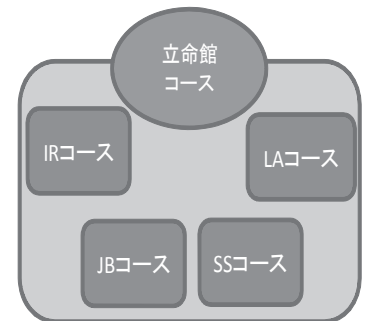


図4 立命館慶祥高等学校 学年進行・コース選択概念図



IRコース：国関、APU
 LAコース：産社、文、映像、APU
 JBコース：経済、経営、法、政策、APU
 SSコース：理工、情報理工、生命、薬

図5 立命館コース

さらに、進学予定学部が決定した生徒だけではなく、検討中の生徒も選択可能な高大連携授業の受講を通じて進学学部を決定できるようにしている。連携授業は全12講座開講されており、所属コースや選択科目の組み合わせによっては選択できない科目もある。原則前後期合わせて2科目の選択が可能となっている。しかしながら、高校2年の1月にコース選択を行い、合わせて高大連携授業科目のうち2科目の受講選択を行うことになるが、その時期までに志望学部が固まっていない生徒も一定数存在しており、深く検討せずに決めた科目、あるいは第一希望の科目が定員超過のために選択できず希望と違う科目を受講することとなる場合もある。その結果、選択した高大連携科目と関係のない学部を最終的に進学学部と決定する生徒も一定数存在している。なお、コースによっては法学部や国際関係学部への入学が優先的に認められるものもある。

将来の目的や目標を持たないまま立命館コースを選択し、そのままRU/APUに進学している生徒に対して、どのような教育プログラムや支援企画等を実施すればこの問題を克服できるのか。このことの検討は、他大学進学を希望する生徒と立命館進学を希望する生徒が混在している二本立ての教育体系を持つ慶祥校において、附属校における内部進学制度の実質を作る課題として、他の附属校以上に重要な課題となる。

(4) 立命館慶祥高校進路指導スケジュール

現在の慶祥高校での進路指導のスケジュールは表4のとおりであり、高校1年から進路指導を木目細かく実施している。高校1年終了時点での文理選択比率は、概ね文系で60～70%、理系で30～40%である。高校2年終了時点で立命館コースを選択した生徒は2012年では136名（3年生全体48.2%）となっており、毎年高校1

表4 立命館慶祥高等学校進路指導スケジュール

学年	時期	進路指導	内容
高校1年	6月	進路ガイダンス（生徒・保護者）	推薦基準や進路指導の流れについて
	7月	第1回 進路希望調査	将来の方向性等調査
	9月	第2回 進路希望調査	具体的な大学名等の検討
	11月	履修説明会（保護者・生徒）	文理選択にむけた検討
		第3回 進路希望調査	2年時の履修内容のチェック
	1月	履修に関する登録	文系理系の選択
	2月	進路ガイダンス	高2冬のコース決定について
高校2年	4月	第1回 進路希望調査	希望状況確認
	6月	進路ガイダンス（生徒・保護者）	推薦入試、特別入試に関して
		第2回 進路希望調査	目標設定に向けての検討
	8月	大学オープンキャンパスへの参加	大学を知る機会
	9月	第3回 進路希望調査	第一志望の目標設定
	11月	履修説明会（保護者・生徒）	コース選択に向けた検討
		第4回 進路希望調査	第一志望大学・学部の申告
	1月	履修に関する登録	コースの選択 立命 or 他大学
2月	第5回 進路希望調査	3年次の履修内容のチェック	
高校3年	4月	第1回 進路希望調査	進路についての情報共有（担任・生徒）
	6月	第2回 進路希望調査	具体的な進路希望
	7月	進路ガイダンス（生徒・保護者）	推薦入試手続き、一般入試、内部推薦
	9月	第3回 進路希望調査	立命コース第一回学内推薦希望調査
	10月	学内推薦出願学部決定	立命コース第二回学内推薦希望調査
	11月	学内推薦依頼書提出締切	第三希望まで提出（変更不可）
	12月	学内推薦選考決定・出願	
		内部推薦プレエントランデイ	学部別入学前教育・課題
	1月	学内推薦合格発表	
		大学入試センター試験・出願相談	
	2月	一般入試・前期入試	
3月	後期入試		

年での進路希望調査からは増加する傾向にある。この増加を、有力大学や難関大学の志望から進路指導によってRU/APUへと積極的に変わったのか、あるいは有力大学や難関大学を断念したからかなどがわかる統計的な資料はないが、2012年度高校3年生の立命館大学を志願する生徒の数を学年別で調べてみると、高校1年時点で80名の志望が、高校2年時点で106名へと増加して最終的に136名となっており、これらの数字の変動状況には例年大きな変化はない。そして、この80名から136名に増加していく生徒たちのRU/APU進学のための目的や目標をこの進路スケジュールの中でどう固めさせていくかは内部進学制度の重要な課題の一つである。

5. 研究の背景まとめ

これまでみてきたとおり、慶祥卒業生の約半数の進学者はRU/APU以外の大学へ進学し、残りの半数がRU/APUに進学している。これが他の附属校と大きく異なる慶祥高校の特徴である。そして、前述したように有力大学や難関大学への進学実績とRU/APUでの活躍の実績が慶祥校の入学者、特に質の高い入学者を一定数確保するためには極めて重要な意味を有している。この実績を具体的に示すことが重要である。

慶祥校に入学してきた生徒たちの志望動機は様々である（図2、3）。また、在学中に進学や将来の目的や目標が転換していく理由や過程は様々であるが、少なくとも生徒の進学や将来の目的や目標が、主体的に転換されていくことを促していく慶祥における取組み（図4、5表4）が重要である。学園の中高大一貫校として、一人でも多くの生徒が具体的な目的や目標を見つけ、主体的な選択肢としての内部進学を決定していくためにどのような手立てが必要であるか。慶祥における高校の3年間全体を見通した教育や進路指導における複合的な取組みが必要である。

II. 研究の目的

研究の目的は、私学慶祥としての「一貫教育」（RU/APUで学びや進路の目的や目標をみつける教育）の特徴を活かした進路指導プログラムを拡充・豊富化することである。拡充・豊富化によって高校の早い段階で自らの将来を考え、学ぶ目的や目標を見出すことができた生徒は、その後の高校や大学進学後の学びの姿勢に好影響

をもたらすものと考えられる。こうして生徒が学ぶ目的や目標を見つけ、自らの学習意欲を高めて内部進学していくことにより、大学生活を通じて自らの進路・就職の目的や目標を実現できる教育を行う高校であるという魅力を打ち出す。

III. 研究の方法

研究は次の3つの方法で進める。

①他校調査

取組み事例や課題についてヒアリング調査を実施する。

②慶祥卒業生のRU在学者に対するアンケート

慶祥高校在学中の取り組んだことや高校での経験とRU進学後大学での学びを通じて感じる点、高校時代にやっておくべき点、後輩である慶祥生との懇談等の機会についてどう考えるかなどのアンケート調査を実施する。

③慶祥高校教諭に対するヒアリング調査

進路指導等の観点や交流機会などの経験についてヒアリング調査を実施する。

これらの調査を整理して政策課題を提起する。

IV. 調査・分析

調査・分析の概要や結果は次のとおりである。

1. 他校（法政大学高等学校）調査 訪問日：2012年6月18日（月）

中学1年から高校3年までを4つのステージに区分けし、それぞれのステージにおける目標を設定している。第2ステージ（中3・高1）では、適性検査などを行い、自分の職業に対する適性チェックなどを行い、将来の進路を考える機会としている。

また、約90%の生徒が法政大学に内部進学しているが、その評価基準は厳しく、約220名の3年生のうち、毎年5%程度の生徒が基準未達で内部進学が許可されない。

大学との高大連携の取組みとしては、高校1年12月のキャンパス訪問、2年12月の大学在学中の先輩の話を3コマ分聞く機会を設けており、生徒が学部選択にあたって非常に有益なものとなっている。

2. 立命館大学在学中の慶祥高校卒業生を対象としたアンケート結果

本アンケートは、主に「RU進学についての自己評価」「慶祥高校での経験の状況」「RU進学予定の慶祥生への情報提供について」などについて調査を行った。アンケートは無記名式で現在RU在学中の慶祥卒業生533名を対象に、慶祥在学当時の登録住所宛に8月上旬に送付した。このうち、配達不能で116件が戻ってきたため、にアンケートが到達したのは417件であった。そのうち80件から回答があり、アンケート回収率は19.2%（到達件数を母数として計算）であった。アンケートの回答者の属性情報が表5のとおりである。回答率の高い学部ではアンケートの回答内容も肯定的な回答が目立った。な回答が目立った。

(1) RU進学決断時期

表6は、RU進学の決断をした時期を質問した結果である。高校1年の早い段階からRU進学を決断する生徒が多い。具体的な構成比は高校1年が44.7%、高校2年

で34.2%、高校3年が18.4%となっている。慶祥校では高校2年1月で立命館コースか他大学コースを選択（図2・表4）することになるが、多くの生徒はそれよりも早い段階（高校1、2年）でRU進学の決断している状況である。これは高校の早い段階から進路の決断に寄与する取組みを展開していく必要があることを示している。

(2) RU進学志望度

表7は、RU進学についての評価を質問した結果である。アンケート回答者の80%以上はRUが第一志望だったとし、90%以上は希望学部に進学しており、また、90%以上がRUに進学したことを肯定的に捉えている。回答者にはRU進学を「良」としているものが多いと推測されるが、それでも高水準の回答である。慶祥校の教育プログラムや進路指導が効果を挙げていることが窺える。しかし、回答の基準の5（肯定的）の比率が、希望学部>第一志望>RUへの進学となっていることは、第一志望が立命館大学のA学部進学というよりも、第一

表5 アンケート回答者属性（学部回生）n = 80

所属学部	回答率	総計	到達母数	1回生	2回生	3回生	4回生	M1（飛級）
文	30.9%	17	55	8	3	2	4	
産業社会	20.9%	14	67	5	2	2	5	
経営	17.7%	11	62	2	4	2	3	
政策	22.9%	8	35	3	1	2	2	
法	12.5%	8	64	2		3	3	
国際関係	23.3%	7	30	1	2		4	
映像	20.0%	3	15	1	1	1		
薬	18.8%	3	16	1	1	1		
経済	7.4%	2	27			1	1	
情報理工	25.0%	2	8	1			1	
生命科学	25.0%	2	8	1	1			
理工	10.5%	2	19	1		1		
スポーツ健康科学	0.0%	0	10					
経営管理研究科	100.0%	1	1					1
総計	19.2%	80	417	26	15	15	23	1

表6 RUへの進学を決断した時期 n = 76

決断時期	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
高校1年	13	3	1	1			5	1	4	1	5		34
高校2年	7	3		1	2	4	2	1	2	2		2	26
高校3年	2	1	2	1	3		2	3					14
中学1年	1						1						2
総計	23	7	3	3	5	4	10	5	6	3	5	2	76

表7 RU進学に関して ①② n = 80 ③ n=79

①第一志望	①回答数	①比率	②希望学部	②回答数	②比率	③RUへの進学	③回答数	③比率
5（肯定的）	52	65.0%	5（肯定的）	63	78.8%	5（肯定的）	46	58.2%
4	14	17.6%	4	12	15.0%	4	26	32.9%
3	5	6.4%	3	2	2.5%	3	4	5.1%
2	6	7.5%	2	2	2.5%	2	2	2.5%
1（否定的）	3	3.8%	1（否定的）	1	1.2%	1（否定的）	1	1.3%

志望が「A学部」進学であり、その進学した大学がRUであったということを示す可能性もある。このことは、一貫校として立命館アイデンティティの形成を進めるといふ進路指導における課題も示している。

（3）RU進学を良かったと考える理由

表8は、RU進学を良かったと評価した学生（②で回答5か4を選択した回答者72名中回答のあった70名を対象）が、順位をつけて上位三つの理由を選択した回答結果である。ポイント欄は回答の1位、2位、3位の選択を、それぞれ3ポイント、2ポイント、1ポイントとして計算をしたものである。各順位で安定的に選択された回答は「充実した正課の学習」である。この回答はポイント数が高く、理由の一位として選択した数も多い。次に「一人暮らしによる自立した生活の経験」と「自分の成長を実感」の回答のポイント数は同じであったが、「成長を実感」は理由の1位とした数が多く、「自立した生活」は理由の2位とした数が多い。また、「慶祥の仲間たちの存在」や「クラブ・サークル活動」といった他人との関わりに関する回答を3位に挙げている。これらから、回答者はRUでの「学びと成長」を良しとし、自立した生活と大学での慶祥生の仲間との交流やクラブ・サークル活動の学生生活を満喫しているようである。これらの充実した大学での様子を進路指導時に生徒にどのように伝え、大学生活をイメージさせ、「学びと成長」の目的や目標を具体化させていくのが課題となる。

（4）高校時代にもっと取組めばよかったこと

表9は、自由記述での回答のうち56名分の内容を抽出した結果である。これによると、英語・外国語や高校時代での勉強・自学学習の取組みが不十分であったと感じているようである。大学での学びに対応できる学力や英語力において、一般入試やセンター入試で入学してきた他のRU学生と比較して劣っていると感じていると記述された回答が目立った。これは、慶祥高校における立

命館コースの教育のあり方や進路指導において、高校での学習に対する動機付けを再検証する必要性を示唆している。なお、在学生の平均GPAや入学直後に受験する英語プレースメントテストの入試方式別のスコア平均点の結果を調査してみると、慶祥出身者のそれは全体の平均値を過去4年間連続して下回っており、かつ他の附属校出身者と比較しても低い数値であった。これは、この回答を裏付けるものであった。RUに内部進学した慶祥生の英語をはじめとした基礎学力の問題が改めて浮かび上がることになる。

表8 RU進学を良かったと考える理由 n = 70

理由	ポイント	理由一位	理由二位	理由三位
充実した正課やその他の学習	84	15	13	13
一人暮らしによる自立した生活	66	5	21	9
自分の成長を実感	66	17	5	5
社会からの大学への評価	54	11	7	8
慶祥高校の先輩同級生後輩の存在	46	8	5	12
活発なクラブ・サークル活動	39	4	7	13
手厚い就職支援	22	4	3	4
多彩な留学プログラムの存在	23	2	8	1
大学スタッフとして活躍できる場	4	1	0	1
奨学金制度の充実	2	0	0	2
その他	13	3	1	2

表9 高校時代にもっと取組めばよかったこと n=56

取組むべきだった内容	回答数	比率
英語・外国語の学修	31	55.4%
自学自習・高校での学習	15	26.8%
友人づくり	3	5.3%
留学・留学生との関わり	2	3.6%
部活動	2	3.6%
その他	3	5.3%

(5) 大学生活の様子を事前に聞く機会とその有意性

表10は、先輩などから大学生活の様子を聞く機会が進学前にあったのかどうかと、その役立ち度合いを訪ねた結果である。表11は、聞く機会があったと回答した48名について、さらに機会の度合いと役立ちの度合いの関係をみたものである。先輩から話を聞いたとする生徒たちは、その内容は自身の大学生活の滑り出しに役立ったとする回答が多く、表11は、「機会十分」のほうが「十分寄与した」とする回答が多く、(3)(4)について話を先輩から生の情報として聞く機会を「十分」に生徒に提供することが重要かつ必要である。

表10 高校在学中に先輩からRUの様子を聞く機会について ①n=77 ②n=66

①聞く機会	①回答数	①比率	②自分に	②回答数	②比率
1 (十分あった)	18	23.4%	1 (役立った)	16	24.2%
2	34	44.1%	2	23	34.8%
3	16	20.8%	3	17	25.8%
4 (なかった)	9	11.7%	4 (役立たない)	10	15.2%

表11 聞く機会があった場合の寄与度合い n=48

機会	十分寄与した	少し寄与した	あまり寄与しない	全く寄与しない	総計
十分あった	11	5	2	0	18
少しあった	5	16	9	0	30

(6) 慶祥の後輩にRUでの経験を伝える機会

表12、13は、後輩との懇談会企画を開催する場合の参加意思とその場合に、説明したいと考えることは何かを訊ねたものである。回答者のうち52名（回答者全体の65%）の卒業生は在校生向けに行うRUの説明会への参加には前向きである。後輩に伝えたい内容としては、「大学での学習方法」「一人暮らしについて」「RUの教育プログラム」などが上位である。これらの項目は回答者の大学生活における課題や苦労したことを挙げていると考えられ、前項の回答からも高校の早い段階からそのような話を聞く機会を持つことにより、目的意識を持ちながら有意義な高校生活を送ることにつなげていくことができるとともに、生徒のRU進学を後押しするものとなる。また、これらの回答はRU進学に限らず、他大学に進学する生徒にとっても共有すべき内容と考えられる。

表12 懇談会企画を開催する場合 n=76

参加意思	回答数
是非参加したい	13
都合がついて可能であれば参加したい	39
参加したいとは思わない	24

表13 説明したいと考えること n=76 (複数回答)

後輩に説明したい内容	回答数	比率
大学での学習の方法	40	23.4%
関西での生活（一人暮らしについて）	37	21.6%
正課などの多彩な教育プログラム	23	13.5%
活発なクラブ・サークル活動	18	10.5%
多彩な留学制度	12	7.0%
図書館など自学自習施設	9	5.3%
学生スタッフとして活躍できる場	8	4.7%
アルバイト	8	4.7%
手厚い就職支援	6	3.5%
充実した奨学金制度	5	2.9%
その他	5	2.9%

(7) 慶祥での学びなどの大学での成長への影響の評価

表14は、各項目について現在の大学生活における自分自身の成長に好影響を与えている高校での活動について5段階で評価したものである。全体的には、どの項目も積極的な評価がされているなかで、高校3年で受講する高大連携授業、留学経験や慶祥高校が毎年受け入れている短長期の留学生との交流、進路指導・ガイダンスに対する評価は、他と比較すると改善の余地がある。

高校3年で受講する高大連携授業は、高校2年の1月に立命館コースの選択と併せて選択する高大連携授業科目を2つ選ぶことになるため、自身の希望学部がその段階で決定しきれていない実情がこの結果につながっていると考えられる。これらの選択が内実を伴うものとなる取組みが必要である。また、留学や留学生との交流はその意欲がある学生とない学生ではっきり評価が分かれている。学部別に見てみると産業社会学部と文学部所属の学生の評価が高い一方で、政策科学部では極めて低いものであった。そして、進路指導・ガイダンスについては、これをもって生徒本人の学力が向上し、具体的な成果が出るといったものではないが、高校時代におけるしっかりと学習や様々な活動や取組みが生徒の進路や将来にとって非常に重要であり意味があるものだという事を本人に考えさせ、気づかせ、意欲を持って高校時代を

表 14 慶祥高校での経験で大学における自分の成長に好影響をもたらしていること n = 80

寄与度	立命コースでの学び		高大連携授業の参加		小論文学習		慶祥生徒間の感動の共有		留学経験や留学生との交流		海外研修旅行の参加		進路指導・ガイダンス	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
5 (強)	25	31.3%	18	22.5%	33	41.3%	33	41.3%	13	16.3%	31	38.8%	7	8.8%
4	36	45.0%	21	26.3%	20	25.0%	31	38.8%	17	21.3%	31	38.8%	25	31.3%
3	8	10.0%	21	26.3%	10	12.5%	8	10.0%	28	35.0%	13	16.3%	22	27.5%
2	1	1.3%	9	11.3%	5	6.3%	3	3.8%	7	8.8%	4	5.0%	9	11.3%
1 (弱)	8	10.0%	9	11.3%	7	8.8%	5	6.3%	15	18.6%	1	1.3%	1	1.3%

過ごす契機となる機会として、生徒だけでなく学校側も捉え直す必要があると考える。

3. 立命館大学在学学生による慶祥生への懇談会についての担当教諭ヒアリング

2012年9月に国際関係学部4回生所属の慶祥OGの学生が来校し、立命館コース所属の高校3年生21名（国際関係学部を志望するIRコース所属）対象と高校1、2年生12名（希望者のみ）を対象とした懇談会を行った。その場に参加した慶祥校の担当教諭によると、参加した生徒たちは大変な刺激を受けたとのことであった。

来校した慶祥OGの学生は、2年連続で西園寺奨学金を受給している優秀な学生であるが、国際関係学部での学びの内容の他、英語学習のポイントや留学の機会、就職活動や大学での仲間との出会いなど幅広い内容を話した。参加した生徒はその学生に対して強い憧れを抱いた様子であった。また、1、2年生を対象とした際には、大学で学ぶことの意味や学部選択の考え方、留学の重要性や英語学習などについて対象に合わせて内容を少し変更する工夫もした結果、1、2年生の生徒も大きな刺激を受けていた様子であった。総じて参加した生徒は立命館大学国際関係学部に対して強い憧れを持つ機会となったようである。話しの内容は表8・13、話しの機会は表10・11を検証するものとなっている。

課題としては、予算確保と日程調整、来校学生の選別、1、2年生は希望者のみとしたため参加者が少なかったこと、このような機会がスポット的な取組みとなっている点などが挙げられる。

4. 進路指導スケジュールについての進路担当教諭ヒアリング

慶祥高校では進路部が主管となって進路指導にあたっている。担当教諭からはRU進学に関わっての主な課題として4点あげられた。それは、①生徒は安易な方向に

流れやすく学習時間も少ないこと、②内部進学基準である評定平均値が加重平均であること、③早期の段階からの進路指導が不十分であること、④進路に関するデータ分析などができていないことの4点であった。各課題は具体的に以下のとおりである。

①については、生徒は「このコースや科目が楽だ」という先輩情報に左右され、安易な方向に流れている生徒も少なくないという実態がある。これは自分自身の目的や目標などが不明瞭であり、高校3年段階で選択する高大連携授業の科目選択が内実化されていない面とも関係があると考えられる。また、学習時間も受験組と比べて低い。

②については、2014年度卒業生までの制度だが、内部進学の評定平均基準3.0を満たすにあたり、3年の評定結果（3倍に集計）が重視されており、1年（同1倍）や2年（同2倍）の評定成績が悪くても3年の成績で挽回できる構造となっている。このため早い段階からの学習に積極的に取組まない生徒がいるという課題である。これは2015年度卒業生より全ての学年の評定平均を同列に扱うこととなるので改善が期待されるが、今後2年間は同様の問題が残る。また、新制度ではRUへの内部進学基準を満たせない生徒が多く発生することが懸念される。しかし、大学での学びを支える基礎学力を高校での学習で身につけさせるには高校1、2年でしっかり学生させる必要があると考えているとのことであった。

③については、立命館コースでは高校3年生に対する進路指導が中心となり、特に進路が明確に定まっていない状態の1、2年生に対しては計画されている進路指導スケジュールを進めていくことが重視され、進路指導としての目標の実現や効果の測定に不十分さがある。

④については、様々な進路企画やガイダンスを行っているが、アンケート分析による企画内容の改善や、希望大学に進学していく生徒のモデル事例を数値化・標準化するなどして、論理的な進路指導に役立てるようなこと

ができていない状況である。

5. 調査・分析まとめ

調査・分析からその結果は次のようにまとめることができ、これらの内容を組み込んだ進路指導プログラムの構築が必要である。

(1) 他校調査により、次の2点が判明した。

① ステージ制（中1・2、中3高1、高2、高3）によって、段階的に将来の進路を検討する体制としており、区分に分けることで到達目標を明確にし易い。

② 定期的な卒業生との交流機会は生徒の進路選択に有用である。

(2) アンケート調査により、RUに進学した慶祥卒業生に関して次の4点が判明した。

① RUへの進学を決断する時期は高校の比較的早い段階であることが多い（表6）。高校の早い段階から進路について具体的に検討させていく取組みが重要である。

② RUに進学したことは肯定的に捉えている（表7、8）が、基礎学力や英語の力量が不足していると感じていることが多い（表9）。大学進学後の学びを支える基礎学力を担保していくことが重要である。

③ 高校生から大学生活についての話を慶祥の先輩から聞く機会があることは意味がある。慶祥卒業生はそのような機会に協力することに前向きである（表10～12）また、伝えたい内容は大学での学び方や一人暮らしについての項目が多い（表13）。事前に大学での学びや生活をイメージさせることが重要である。

④ 進路指導やガイダンスのあり方も検討が必要である（表14）。あり方の検討では、②にある英語を含めた学力問題や教員ヒアリングにおける「安易な方向」への流れから、高校での学習を促進する仕組みを取り入れることが重要である。

(3) 教員ヒアリングにより、次の2点が判明した。

① 懇談会実施結果や、上記(2)③からも大学生と高校生との懇談会は非常に有用であることがみてとれる。しかし、組織的かつ継続的な機会の設定ができていない。

② 生徒は安易な方向に流れやすいため成績の管理を確実に行う必要がある。

③ 進路指導の主眼は他大学に進学しようとする受験組

であり、立命館コース在学学生やその方向を目指す生徒に対する取組みが不十分である。

V. 政策立案

「IV. 調査分析」を踏まえ、政策として立命館コースを志望あるいは検討している慶祥高校生に対する立体的な進路指導のスケジュールとプログラムの枠組みを提案する。受験勉強から解放されることになる学習への意識低下の弊害を回避するために、具体的な進路目標や成績目標を設定されたターム（高校の全9ターム）に応じて検討を加えさせ、自分の立てた目的や目標への成績進捗管理を徹底させていくものである。つまり、生徒の進路目標に対するPDCAサイクルを設定するイメージである。

1. 進路指導のスケジュールとプログラムの概要

進路指導プログラムは目的や目標を持ってRUに進学するという「大学進路・将来目標管理」、RUでの慶祥生の学力実態から設計した「成績管理」「進路・交流プログラム」の拡充を、9タームに分けて組み上げたところに特徴がある。本プログラムは、高校3年間を9ターム（1年であればⅠ-Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ）に分割し、その区切り毎に進路における目標設定と成績における具体的な到達目標設定を行う。そして、次のタームに進んだ時点で前のタームで掲げた目標の進展度合いを振り返らせ、それを踏まえて次の新たなタームにおける進路目標や成績目標を設定させる。このことにより、高校卒業後の進路についてRU/APUあるいは有力大学や難関大学で何を学ぶのか、何をしたいのかといったテーマに対して具体的な目的や目標を深く検討させる枠組みを構築し、併せて進学後の学びを担保する学力を身につけさせる。このような取組みを後押しする機会として、RU在学中の慶祥卒業生との懇談交流や、現に立命館コースに所属している高校3年生と1、2年生の交流、あるいは社会人となっている卒業生と高校3年生との交流機会を設定することで、生徒本人の自己省察を促進させ、具体的な目的や目標の設定につなげることを目指す。

表 15 立命館コースにおける進路指導目標管理俯瞰表

学年	ターム (月)	現行の大まかな 進路指導内容	現行の進路関連 スケジュール	主な行事等	大学進路・ 将来目標管理 (ミニマムライン)	成績管理 (基礎学力向上を 視野に)	進路交流プログラム (交流対象)				交流内容イメージ
							高校 1.2年	高校 3年	RU 大学生	社会人	
1年	1-I (4~7)	推薦基準や進路 選択の流れにつ いての情報共有	個人面談 定期試験 6月	オリテ合宿 高校総体 立命祭	将来の目標を大 まかに考える	高校1年での具体 的学習目標をプラン し行動する		●			立命コース選択理由 2年間の高校生活につ いて
	1-II (8~11)	具体的な志望大 学名の検討	夏期講習 定期試験 9月 履修説明会	体育大会 RU/APU 訪問	進学を希望する 大学・学部を大 まかに考える	高校3年間の具体 的学習目標をプラン し行動する			●		大学での学びにつ いて 高校で取組むべきこと について 立命館・所属学部選 択理由
	1-III (12~3)	文系理系選択 高校2年時履修 内容チェック	定期試験 12・3月 冬期講習	球技大会 英語フェス	1年間の学習等 を検証し、目標 と現実の乖離を 理解する	1年間の成績状況 をチェックし、3 年間の具体的学習 目標を適宜再設定 する		●			学部選択の経過につ いて 3年間の高校生活につ いて
2年	2-I (4~7)	進路の具体的目 標設定	個人面談 定期試験 6月	高校総体 立命祭	大まかな将来の 目標を可能な限 り具体化する	高校2年での具体 的学習目標をプラン し行動する		●			立命コース選択理由 2年間の高校生活につ いて
	2-II (8~11)	第一志望設定 コース選択の検討	夏期講習 定期試験 9月 履修説明会	体育大会 海外研修	大学での学びを イメージし、大 まかだった進学 希望大学・学部 を具体化する	当初の計画と現在 の到達点をチェッ クする			●		大学での学びにつ いて 高校で取組むべきこと について 立命館・所属学部選 択理由
	2-III (12~3)	コース選択 (他大学・立命館)	定期試験 12・3月 冬期講習	球技大会 英語フェス	コース選択の理 由を明確にし、 主体的なコース 選択を実現する	立命コース推薦基 準達成に目途をつ ける		●			学部選択の経過につ いて 3年間の高校生活につ いて
3年	3-I (4~7)	進路希望調査 (RU進学学部枠設定) 高大連携授業	個人面談 定期試験 6月 東大京大 OB 訪問	高校総体 立命祭	大学での学びや 生活を具体的に イメージする	2年間の成績状況 をチェックし、高 校3年の具体的学 習目標を適宜再設 定する。	●			●	大学・高校時代の経験 や目標と社会人生活と の関係性
	3-II (8~11)	RU 進学学部の決定 出願大学・学部の決定	夏期講習 定期試験 9月	体育大会	大学で学びたい 専門分野の内容 をイメージする	模試偏差値等で大 学での学びを支え る基礎学力を チェックし対処す る			●		大学での学びにつ いて 大学生活について 残りの高校生活で取 組むべきこと
	3-III (12~3)	立命コース出願 立命館コースプ レゼンテーション センター試験、入試	定期試験 12・3月 RU キャンパス ツアー冬期講習		学部を選択し、 大学入学後の目 標を設計する	同上	● (中3)			●	社会人経験を踏まえて の大学生活のあり方

2. 制度の内容

(1) 高校1年

1-Iでは、高校1年間の具体的成績目標を立てる。目標基準としては、模試偏差値や校内順位、TOEFLスコアや数学・英語などの検定試験の合格、評定平均値などが挙げられる。また、将来の目標についても憧れレベルで大まかに検討することによって将来進路に対する意識を絶えず置くように習慣づける。立命館コースに所属する3年生との交流機会を通じて高校3年間でどのように過ごすのか考える機会とする。

1-IIでは、高校1年での成績が判明してきた段階で、3年卒業時における具体的な成績目標を掲げる。進路目標は進学希望大学について検討し積極的に資料やHPに

触れることとさせる。また、8~9月にかけてはRU在学生との交流機会を設け、その参加を通じて大学で学ぶことや道外で一人暮らしすることに対してイメージを持たせる。

1-IIIでは文理を選択する。当初掲げた成績目標と現実との溝について認識を深める。このままで良いのか再設定が必要なのかどうか検討し、進路目標については結論が出なくとも考えさせる機会とする。立命館大学への進学が決定した3年生との交流機会を通じて1年間を振り返りつつ今後の2年間について省察する。

(2) 高校2年

2-Iでは、高校1年時に設定した将来の目標を深め

ていき進学を希望する大学、についても検討を始める。成績についての具体的目標を1年間同様に設定するが、1年間の到達状況を踏まえたものとする。また、高校3年生との交流を通じて、高校2年生における進路選択に関わって取り組むべき課題を考察する。

2-IIでは、進学を希望する大学や学部を将来の目標との関わりで具体化させる。成績目標の達成状況や進捗状況を検証しつつ1年からの成績の推移を確認し、成績の具体的目標に対する意識を強める。RU在學生との交流機会を通じて、大学での学びや大学生活をイメージすると共に高校生活で取り組むべき課題を具体化させる。

2-IIIではコースを選択する。これまでの取組みを踏まえて、明確なコース選択理由に基づき主体的にコースを選択できるようにする。RUコースでは進路を希望する学部も合わせて選択する。内部推薦基準と自身の成績目標の達成状況を確認し、高校3年での学習目標について検討を始める。RU進学が決定した3年生との交流を通じてそのヒントを得る。

(3) 高校3年

3-Iでは立命館コースの高大連携授業がスタートする。自身の問題意識に応じて学習テーマを設ける。高校3年時の成績目標はRUの希望進学学部の合格基準となる偏差値を念頭に置いて設定する。また、1、2年生との交流機会では、自身の2年間を振り返り、良かった点や反省すべき点。立命館コース選択理由などについて伝える。また、社会人との交流によって大学卒業後の将来進路についてイメージを作り始める。

3-IIでは、成績状況を把握しながら目標達成に向けて努力を継続し、最終的な進路学部を決定する。RU在學生との交流機会は3年生のみを対象とした機会となるので、大学での学びをイメージすると共に具体的な問題意識について大学生と交流する。

3-IIIでは、内部推薦入試への出願合格発表となる。3年間を検証しつつ大学入学後の学習目標を設定する。慶祥在校生（1、2年生+中3）や社会人との交流機会を通じて、高校生活を省察し大学生活やその後の将来を展望する。

3. 交流機会

将来の進路や成績の目標設定を行う場合、先輩の生の声は参考となる。一般的には将来の進路や成績目標は個

人が設定し、個人の努力で達成していくものであることが前提である。それを後押しする企画として交流機会を提供する。

具体的には図6のように、RU大学生と慶祥生との交流、高校3年生と高校1、2年生の交流（慶祥中学3年生含む）、社会人と高校3年生の交流である。大学生との交流は、1、2年生と3年生の交流に区別し1、2年生向けには高校生活に関わる内容や大学での学びについてのテーマを主なものとする。3年生にはより具体的な進学希望学部の学びや進路就職状況などについて、あるいは大学生活と一人暮らしの生活についての留意点などを主なテーマとした内容とする。開催は懇談形式とし、生徒20名～30名程度の規模で開催し、一方的に大学生の話聞く機会とせず、その場で様々な質問を出し合いその応答を含めて意見交流することで参加者の意識を高め、大学での学びや生活についてイメージを膨らませるようにする。なお、参加する大学生は各学部から人選し（10名以上規模）、8月～9月の大学休暇期間に開催する。生徒には開催スケジュールを7月頃に事前に広報し参加を予定させる。また、社会人との交流では高校3年生を対象とし、大学卒業後の世界に触れることにより、大学での学びが社会とどのようにつながっているのかイメージを持つ機会とする。

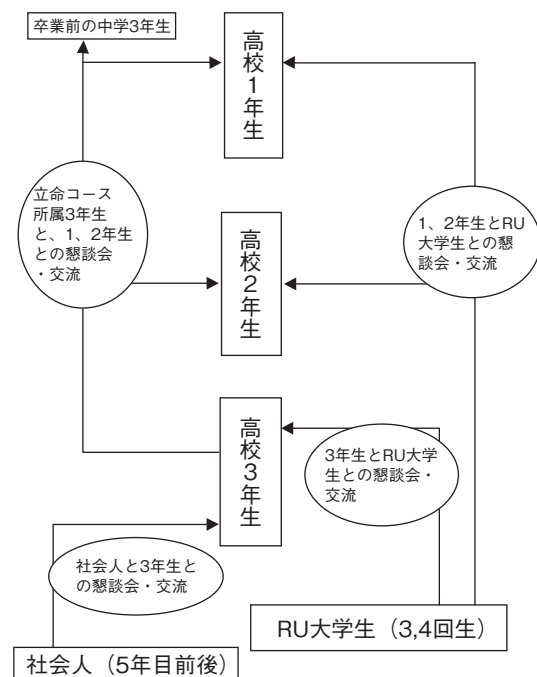


図6 交流関係図（慶祥生・大学生・卒業生）

4. 運営体制

進路指導は慶祥高校進路部が主管となるが、主な指導対象は他大学コースやSPコース制の受験指導となっている。政策を進めるために進路部の中で立命館コース担当者を設定する。また、学部別の担当教員（Rスペシャリスト）が高大連携に関わる取組みについて学部の教員などと連携し年間計画を策定する。

慶祥事務室の体制としては、それぞれの学部事務担当者と接点を設け、高校生と交流するRU学生の選抜にあたっての実務的な処理を担当することとし、慶祥教員は授業の展開や生徒に対する対応に集中できるようにする。また、慶祥生の進路に関わって入学後から卒業までの志望の変遷や志望の変化動向など実態を調査分析し、現状に即しながら慶祥教員と連携する運営体制の構築を目指す。また、生徒の目標管理を可視化するためのキャリアチャート表などの作成を担う。

財政面は一貫教育推進予算と進路指導費予算の組替えにより必要な経費を確保する。

VI. 研究のまとめ

これまで見てきたように、高校の早い段階から進路指導に関わる取組みを行うことは、生徒が目標を持って高校生活を過ごすきっかけになると考える。高校生活の初期から将来の進路を考えることや、具体的な成績目標を掲げその進展を生徒自ら管理していくことは、生徒にとっても学校にとっても負担となる面はあろう。しかし、内部進学によって受験勉強を行う必要がなくなることで、高校での学習の質を低減させてしまうことはそれ以上に問題である。本稿では、現行の進路指導に沿いながら、生徒本人が将来や成績に関する目標設定を主体的に実施していくよう促すことで、目的意識を持った高校生活を過ごすきっかけとなることを狙っている。

もちろん、慶祥高校では他大学に進学する生徒も半数程度存在している。しかも、当初から他大学を志望している生徒だけではなく、コース選択の段階で決断する者、他大学コースからRUを志望する者やその逆といった多様なケースも存在している。しかし、これらの生徒にも高校当初から目標設定をさせていくことは有効なものであると考える。

他方で、生徒の高校生活は将来の進路や成績を向上させることのみが重視されるものではない。学園祭や研修

旅行をはじめとした様々な学校行事や部活動の経験を通じて、高校生は大きく成長していくことも事実である。生徒が成績管理のなかにこれらの学校行事や部活動を組み込むことによって、生徒の一人ひとりの個性を伸ばす教育を作り上げていく。今次提起するスケジュールとプログラムは有力大学や難関大学を志望する生徒にとっても、それらの大学への入学を自己目的とするのではなく、そこでの「学びと成長」や進路就職の目的や目標を設定する上でも有効なものであると考えている。このような考え方を前提にして「V-2制度内容」を組んでいる。

慶祥で学ぶ全ての生徒が、高校での学ぶ目的を見つけその目的に向かって努力する。そのような生徒たちを学校がサポートしていくというのが本稿の狙いである。

VII. 残された課題

残された課題は大きく次の3点である。

①「立命館コース」所属生に対する毎年の定期的調査とプログラムの精緻化

経年的な調査を行い、生徒がどのような問題点を生徒が抱えているかをより詳細に分析していく。さらに、コースに焦点を当てるだけでなく、生徒個人いわゆる「個」に焦点をあて、生徒個人の動機付けを高めていくようなプログラムに精緻化する。

②「立命館コース」以外に所属する生徒に対する特化した進路指導

当初から他大学へ進学することを決断している生徒に対して、3年間における具体的な成績管理や目標管理をさせるものとして進路指導プログラムの内容を特化させる。

③北海道における立命館ブランドの構築

慶祥中学や慶祥高校に受験する段階からRU/APUに対する進学希望が増加させていくためには、RU/APUが北海道において憧れの大学として位置づけられるよう道民への情報提供が重要となる。

【参考文献】

- 1) 櫻井茂男『自ら学ぶ意欲の心理学』有斐閣、2009年
- 2) 市川伸一『学ぶ意欲の心理学』PHP新書、2009年
- 3) 山田礼子『学士課程教育の質保証へむけて』東信堂、2012年
- 4) 藤田晃之「学びの意味を伝える指導が大学選択の視点を変

える」『Between』2012年4-5月号

- 5) 内村浩「教育に継続性を持たせるために高大連携はどうあるべきか」『Between』2008年冬号

Creation of a career guidance program that cultivates the goals and objectives of study centered on courses at Ritsumeikan
—Focusing on the results of a survey of Keisho graduates who entered Ritsumeikan University—

TERAOKA, Masaki (Assistant Administrative Manager, Office of Ritsumeikan Keisyo junior and senior high school)

ITO, noboru (Senior Researcher, Research Center for Higher Education Administration)

KONDO, Shigeo (Deputy Managing Director, Division of Integrated Primary and Secondary Education)

MURAKAMI, Toru (Administrative Manager, Office of Ritsumeikan Keisyo junior and senior high school)

Keywords

Ritsumeikan Keisho, entering Ritsumeikan University, Ritsumeikan courses, survey of Keisho graduates, career guidance, interaction

Summary

Here we propose a career guidance program that manages academic performance and career path objectives from the April of the first year in High School for students of Ritsumeikan-affiliated Keisho Senior High School who go on to study at Ritsumeikan University. Keisho Senior High School differs from other affiliated schools as the policy is for half of the students to go on to study at Ritsumeikan University and the other half to go on to other schools. Due to Keisho being located in Hokkaido, it is unlikely that that policy will change in the future. Rather than aiming to increase the number of students going on to Ritsumeikan, a proposal has been formed based on issues raised in the survey of Keisho graduates presently studying at Ritsumeikan University, to be an incentive in order to encourage students aiming to go to Ritsumeikan University in their studies. The proposal involves setting up specific performance objectives in order to acquire basic academic skills during high school as collateral for growth after entering the University and clearly forming a goal for the future in order to achieve the performance objectives. As further encouragement, opportunities will be created for Ritsumeikan University students, members of society and Keisho students to interact and for interaction between first, second and third year Keisho Senior High School students.